



城跡」、参道の両側に2本の大ケヤキが立ち夏祭に屋台がひきだされる「智賀都神社」、「妙哲禅師の墓」のある「伝法寺」、江戸時代末期に二宮尊徳（金次郎）の設計により造られた「二宮堰」、江戸時代初期に日光山信仰により奉納され、徳次郎の地名の由来を伝える「篠井神社」、60年に1度開帳される木造虚空蔵菩薩立像のある「東海寺」をめぐる。

日光街道について

江戸幕府は日本橋を起点として、東海道、中山道、甲州街道、奥州街道、日光街道の五街道を設け、道中奉行の支配下におきました。そして、一里（約3.93km）ごとに一里塚を築いて道しるべとし、街道の両側には、マツ、スギ、ヒノキなどの並木を植えて、旅人の行路に風情を添えるとともに、夏は休息の場を提供しました。また、各宿場には、本陣、脇本陣、旅籠、問屋場などの施設を設け、特に、幕府役人や参勤交代の大名などの利用を考えた整備を行いました。



石那田(六本木)の一里塚

日光街道は、日本橋を起点とし、千住から宇都宮を経て日光鉢石まで21の宿場がありました。元和2年（1616）4月17日、徳川家康が駿府城（静岡市）で没すると、翌年將軍秀忠により、家康の靈廟である東照社（宮）が造営され、江戸幕府の手厚い保護を受け、日光へ参詣するための道が数多くつくられました。なかでも、幕府の五街道の1つである日光街道は、將軍の日光社参をはじめ、諸大名、一般の参詣客でにぎわいました。

家康の命日に東照宮で行われる大祭に將軍が参詣することが日光社参であり、江戸時代を通じて19回（うち、將軍就任前のもの2回、大御所時代のもの1回を含みます。正式な將軍職が行ったものは16回となります。）行われました。日程は、4月13日に江戸を出発、岩槻、古河を経て、15日に宇都宮城に泊まり、翌16日に日光に到着、17日に祭礼を行い、翌18日に帰途に着くのが一般的でした。このように日光街道は、江戸と聖地・日光を結ぶ重要な道でした。